

Dialog



Vol.165

世田谷区民合唱団会報

2023-5
2024.3.20

名曲コンサート「第九」の演奏は大成功



2024年2月18日（日曜日）昭和女子大学人見記念講堂にて、せたがや名曲コンサートが開催されました。4年前、「第九」の演奏が直前で中止になりとても残念な思いがありました。今回は指揮者に尾高忠明氏をお迎えして気持ちも新たな公演となりました。うれしいことにチケットは完売となり、聴衆の皆様にとっても楽しみな演奏会となりました。世田谷フィルハーモニー管弦楽団の「プロメテウスの創造物」序曲の演奏が終わると合唱団が入場し、拍手がわき起こりました。ソプラノ迫田美穂さん、メゾソプラノ向野由美子さん、テノール清水徹太郎さん、バリトン上江隼人さんの四人の歌手が登場し、最後に尾高先生が中央に立たれ指揮棒が振り降ろされ、いよいよベートーヴェン「交響曲第九番合唱付き」の演奏が始まりました。

「第九」を終えて

音楽監督 坂本 秀明

この度、せたがや名曲コンサート「第九」に参加された皆様、お疲れ様でした。本番を客席から聴きましたが、心のこもった素晴らしい演奏でした。今現在の実力を十分に発揮しきった演奏だったと思います。

今回は、定期演奏会が終わり、すぐに練習に入れたので、時間的にも余裕があり、充実した練習ができました。

何度も歌われている方、初めて歌われた方、様々でしたが、基本を重視して、ソルミゼーション(移動ド読み)の徹底、手拍子や足拍子を駆使してのリズム練習の徹底も効を奏したのではないのでしょうか。



尾高忠明先生も演奏の後に私に「合唱頑張ったね」とお声を掛けて頂きました。皆様にとっても私にとっても名誉なことだと思っております。副指揮の松川先生にもお世話になりました(ソルミゼーションを誉めていました)。

ヴォイストレーナーの嵐田先生、ピアノの西谷先生、尾島先生にも感謝です。特別参加の皆様にも感謝です。

さて、次はフランスの巨匠フォーレの「レクイエム」、杉山先生が厳選された「コロナ禍に希望の光を灯した作品集」、没後10年の林光先生編曲の「日本抒情歌曲集」です。さらに高評価をいただけるように頑張りますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

本番当日、舞台袖で出番を待ちます。いよいよ始まります。





委員長 神保 仁士

満員の聴衆を目の前にして舞台上で奏でた歌声は如何だったでしょうか。
今回の「第九」はおめでとうございます。

私も様々な演奏会に参加させていただきましたが、満員の聴衆を舞台上から眺めたのは初めてでした。こんな光景が観られるとは夢にも思っていませんでしたが、こんな事ってあるんですね。世田谷区民合唱団の底力でしょうか。

名曲コンサートの舞台裏をご案内したいと思います。

世田谷文化財団音楽事業部、世田フィル、合唱団から各々3名が参加して、合計9名で名曲コンサート実行委員会が設けられ、ここが主催して計画・企画・運営が行われています。

合唱団からの参加者は団員1名と運営副委員長2名です。私、神保は実行委員会設立時に当時の運営委員会から一人の団員として参加を依頼されて引き受け、それ以来団員としての立場で実行委員会に参加して今日に至っています。副委員長は実行委員会と団との連絡調整の役を担っております。従いまして、団の運営委員会は名曲コンサートに関して何も係わっておりません。演目の希望や団内事情を踏まえて実行委員会に具申するだけです。要望や具申を受けて、実行委員会で協議検討を重ねて様々に決定されます。

具体的には、演目、指揮者、ソリスト、場所、日程、チケット販売、リハ・GP・本番時間割、登壇のタイミング、チラシ・プログラムデザイン、ロビー回り対応等、ほぼ演奏会の全ての事項です。基本方針が決まれば後は音楽事業部とフィルと合唱団が各々責任を持って自分の役割を全うする事に徹します。運営委員会は実行

委員会での決定事項を伝えているだけです。

人見講堂の改修工事によって舞台環境が大きく変化しました。舞台が狭くなりました。反響板の後方の壁が前にせり出して舞台の奥行きが短くなりました。団の立場から言えば、山台の段数が減って横広がりになりました。この事は登壇できる人数が減ることを意味し、今回では120人程度が限界でした。

合唱団創立後最初の「第九」は12段程度で、一つの段に約30人詰め込んで単純計算で360人以上が乗っています。証拠のテレホンカード（古いですね！）がありますので、何時でもお見せいたします。「89.12.23」と記されています。“未使用”なので高く売れるかも！

山台に何人が乗れるか？はベンチの有無で大きく変わります。「第九」ということで区民にも参加を呼び掛けて、コロナで歌を封印されてきた多くの方々との共演も果たしたい、との思いで「団員の高齢、腰痛対策」を理由に、ベンチ無しで「4楽章からの登壇」ということで尾高先生と調整を図りましたが、「ソリストも含めて1楽章からの登壇以外の公演を行ったことはありません」との回答でした。ご指導に訪れたら考えが変わるかと思いましたが、そのような雰囲気は一切見せずにベンチが必須になりました。乗れる人数と山台キャパのせめぎあいが続く、40～50分間も舞台上で動かず、緊張感を維持しながらもリラックスして過ごせることを考慮し、数名のご協力を踏まえて団員間の距離55cmを割り出しました。背もたれが無い分、客席の椅子よりも少し広い間隔に落ち着きました。それでもスペースが足りないのです、山台の昇降スペースにパイプ椅子を置くことを思いつきました。今回初めての試みで、その場所に割り振られた方はお手数でしたが、我ながらグッドアイデアでした。こんな単純なことが思い付かないんですね。習慣や思い込みを破るのは簡単ではなさそうです。

最初から登壇していたことが結果的に良かったのではないかと思います。今回の様な演奏会は過去にも二、三回あったような記憶があります。歌い始めるまでに待ちくたびれてしまい、気持ちが乗ってこなかったような感じでした。今回は全く違いました。歌うまでの時間の何と短く感じた事か。心地よい緊張感を維持しながら歌い始めた時のハーモニーは過去に耳にしたことが無い響きを感じました。皆さんがそれぞれに想いを込めて一体となって音楽を構築していく気持ちがホールの隅までいっばいに響き渡り、観客一人一人の胸の中に届き、そこからは一音も聞き漏らすまいとする緊張感を持った聴衆の反応を感じ取り、観客との真剣勝負の果し合いさながらの想いでした。このようになるのであれば最初からの登壇も悪くないですね。

実行委員会では2,000人近くの観客を迎える経験が無く、受け入れ態勢は人員を増やすなど様々検討を重ねて万全を期して臨みましたが、最後は開き直りでした。入場して行き場が分からずロビー内で多くの方の滞留が懸念されましたが、案内人員を増やしたこともあって滞留も無く円滑な対応が出来たようです。ロビー周りでお手伝い頂いた多くの皆様に感謝申し上げます。

開演20～15分前の時間帯がピークで、講堂前の階段下道路付近まで列が伸びましたが一時的でした。それでも開演時刻が遅れてしまいました。前回のドイツレクイ

エムの際は来場者が1,000人未満にもかかわらず、大学の入り口まで列が繋がってしまい来場者から苦情を頂きました。これはコロナ明け直後で未だ検温、手指消毒の実施が叫ばれており、その対応で円滑な入場が叶わなかったことが最大の要因でした。チケットの扱いについては次回からは紙チケットは廃止して、ネット購入に変更することをお勧めします。

このシステムを利用すると、希望される席を希望する枚数だけ何時でも購入できます。合唱団専用のパスワードとIDを知り合いに教えれば第三者が利用して購入することも可能です。これによって行き場所がないチケットが無くなることが最大の利点です。割り当てで貰ったけど渡す相手がいないという事態が解消されます。追加チケットの申し込みも必要ありません。追加の紙チケットを音楽事業部に申請するごとに、発行済みチケットについて、くれぐれも「蓋を開けたら空席だった」という事が無いよう念押しをされています。これは終盤に満席になる可能性が迫ってくるにつれて敷居が高くなってきました。

名曲の裏事情を今回は少し紹介させていただきました。実行委員会は年間4回程度の会議をしています。これからも区民のために安価で質の高い合唱音楽の提供ができるように皆様方のご協力を宜しくお願い致します。

名曲コンサート

T13 水谷 利明

～感謝～

多くの方々に支えられ素晴らしい演奏会になりました。ご指導頂いた坂本先生、松川先生、西谷先生、尾島先生、世田谷フィル、会場運営の皆様にご礼申し上げます。

また、本ステージにおいて、ことのほかテノールパートとアイコンタクトをとって下さった（ような気がした）尾高先生に感謝申し上げます。

おかげさまで管弦打との一体感、大袈裟に言えば「Überm Sternenzelt」をイメージしながら気持ち良く歌い切ることができました。

～感激～

2階席で聴いていた娘家族によると、隣席の女性が感激のあまり涙されていたそうです。帰路立ち寄った飲食店では「素晴らしかった」「元気になった」との声を漏れ聞きました。ドイツ語歌詞ながら、言語抑揚と旋律の高揚感で多くの方にSomethingを感じて頂けたようです。理想郷や友愛・平和、天空・自然を提示する楽曲概念が、素直に届けられ非常に嬉しく思います。様々な人にさまざまな思いを届けられる「第九」は正に「Zauber」でありました！

～巡らす想い～

「第九」は、物心ついた頃から多々聴いてきたものの、その「心」については全くと言っていいほど無知でした。合唱を始めておよそ半年。初めての「第九」でしたが、その世界観など多くのことを吸収でき、満足度は高いです。



日本人にも耳馴染みのある楽曲を数多く生んだ Beethoven。とはいえ、彼が生きた時代は、産業革命、フランス革命など社会体制や人心が大きく変革した時代。そのような中で聴覚を失った彼はどのような気持ちでこの難曲を作曲したのか。最終楽章の歌声はどのように響いていたのか。巡らす想いは尽きません。

余談：

分子生物学者ラブロック博士が提唱する「ガイア（地球）理論（※1）」に傾倒された龍村仁氏（※2）が、40年にわたり「地球交響曲第一番～第九番」を創作されました。第九番(2020年公開)は「第九」演奏会（指揮：小林研一郎氏）開催プロセスを映し出します。もっぱらミニシアターで自主上映されていますが、お薦めです。

※1 「地球は一つの生命体であり、その自然環境と生物は相互に影響を及ぼし合いながら、自己調節システムを作り上げている」とする説。

※2 元NHKディレクター。伝説のロックバンド「キャロル」のドキュメンタリー(1973年10月放映) / 映画(1974年6月公開)制作。

B10 檜垣 謙一

1950年代の終わりまで、日本に於ける音楽会会場は、内幸町のNHKホール、日本青年館などの他、メインは、何と言っても日比谷公会堂でした。日比谷公園の黒々とした森をバックに荘重な建物があり、2階にあるホール入口に至る広い石階段はそこだけ煌々と電気に照らされていました(水銀灯ではなく電気である)。その階段を一段一段上がるたびに、これから聴く音楽への期待で胸が高まったものです。

当時は、来日する音楽家が少なかったので、ほとんど聴きに行けましたが、中でも印象に残っているのは、ウィーンフィルと来日したカラヤン、ボストン響と来日したシャルル・ミュンシュです。

1960年代になると、上野に東京文化会館が出来て、主な催しは、全部そちらへ引越し。そこは、近代的で、広い空間で、響きも良く、かつ、音の粒立ちもハッキリしているので、オケの楽器一つ一つが聴き分けられそうでした。そこで最初に聴いたのがニューヨークフィルのバーンスタインでしたが、出し物が知らない曲ばかりで、よく理解できず、キツネにつままれたような気持ちで帰路についたのを覚えています。上野では、日本フィルハーモニーとN響の定期会員となり、二、三年通いました。

日フィルは渡辺暁雄が常任で、シベリウスを覚えました(同氏の父親がフィンランド人)。また、一度だけ若き小沢征爾が客演で現れ、聴くというよりは、異次元の指揮にただただ見とれて、なるほど、こういう指揮をすると、オケは(人は)こういうふうに対応するんだ、という至極当たり前の事に感心したりしていました。

N響については、どういうわけか指揮者の記憶が無い。暮になると国立音大の生徒200人を集めて「第九」を演奏したんですが、200人も乗ると、オケの後ろにビッチリと人の壁が立上り壮観でしたが、2年間に渡り2回聴いてるのに、演奏の印象が残っていない。残っているのは、第4楽章の圧倒的音量感だけなんです。

これが「第九」の演奏を最初に聴いた機会でしたが、その後すぐに仕事に着き、高度成長やらバブル期やらの超多忙と喧騒に巻き込まれて、音楽をゆっくりと聴き

に行く機会は無く、たまに頼まれて 100 人位のコーラスの応援要員として歌うだけでした。この中には、「第九」もあり、この頃から「第九」は、聴く曲から歌う曲に変わった訳です。

「第九」を聴いた直近の機会は、退職後の 2006～7 年頃、葛飾シンフォニーホールでの読響、新国立、下野竜也です。この時の下野竜也は、昨年暮の N 響「第九」とは、比較できない程若々しく意欲と生气に溢れていました。暮は(TV 鑑賞)、冒険も主張も、もうしませんという人生を送っている下野という一人のオジサンの姿をそこに見たような気がしています。

尾高忠明。我が国における最高と言われているオケの正指揮者。まさかこの人の指揮に接する事が出来るとは、思いもしていなかったです。アマチュアのオケとアマチュアのコーラスを相手に。



招聘には、さぞやご苦労や困難があったと思い、携わった方々に深甚な敬意と感謝を捧げます。世田谷区民合唱団には、20 年以上在席していますが、あー！！続けていてホントに良かった、恐らく生きているうちにもう一度経験出来ることは無いだろう、私の音楽人生の最高の宝物の一つになる事は間違いありません。尾高忠明先生ほんとうに有難うございました。

「第九」を歌い終えて

A05 宇川 八千代

尾高先生指揮の「第九」を歌い終えた瞬間、とてもすがすがしい気持ちになりました。今までずいぶんと「第九」を歌ってきましたが、これで最後になってもいいなと。あんなに大きな声で楽しく歌ったのは初めてでした。

坂本先生からこの曲の背景や詩についてのご説明をたっぷりとしていただきましたので、歌うときの気持ちに厚みが出たようです。これまではいかにして楽譜のとおりになんとか歌うかが自分にとって重要なことでした。

本番直前まで尾高先生に厳しく細かいご指導をいただき緊張感が高まっていましたが、先生の最後のお教え、『楽しんで歌いなさい』で全く違う次元へ行けました。最も基本的なことを忘れていました。

本番のオーケストラの出来は素晴らしく、私はほぼ真ん中に位置していましたので、第 4 楽章でオーケストラの右側と左側の掛け合いが素晴らしく、うねりを生じてノリノリだったことを堪能しました。それ故私たちも本当に気持ちよく合唱できたのだと思います。



私と「第九」

S27 鈴木 悦子

私が合唱団に入団したのは、平成9年(1997年)9月でした。さすがにその年の「第九」は12月でとても無理。受付のお手伝いをした事を覚えています。翌年の12月に初めて山台に乗りました。その時無我夢中だったと思います。それから十何回と出演したのですが、自分が満足した「第九」はなかった様に思います。しかし、今回の「第九」は違いました。楽譜の階名唱法をした事。ミレドレファミレドなど音符の上にルビをふり、けっこう大変でした。

本番では第一楽章から第四楽章までずっと舞台の山台に座って待ちました。サッと立てるか心配でしたが、さあ歌えるぞと思い立ちました。私の前はホルンが演奏していたので、その方を見ていたり、満員の会場のお客様を見たり、尾高先生の指揮をじっと見ていて時間が経つのが早かった様に感じました。世田谷フィルの皆様も、私たちに寄り添って下さった様に感じました。

そしてなんと言っても尾高先生がアマチュアの私達を導いて下さった事です。細かい音程のご指導はあまりなく、言葉の意味を理解して心で歌う事を大切にと常に言ってらっしゃいました。「女性は包み込む様に」「大きく大きく天に向かって」など、私はそんな感じでこれまで「第九」を歌っていたらうか。マンネリ化の脱出です。



以前の「第九」よりも声が出せた様な気がしました。終了後、ホッとして自分が笑顔になれた事を覚えています。

素晴らしい有名な指揮者である尾高忠明先生に「第九」を振って頂き、心より感謝いたします。

嗚呼！A！良かった！

T03 稲崎 宏治

練習は近場に絞り、ステージも遠慮する昨今なので今回も客席で。

馴染みがあるせいからか一番少人数のテナーの声が良く通る。ハイライトの二重フーガでは練習中は「ガああああ〜」と自分のパートをガなるだけだったのだが、離れて聴くと二つのメロディーを四つのパートが追いかけてくる調和と迫力には感動を覚えた。そして最後のいつもは息絶え絶えの「ゲッターフンケン」のAが見事に響いてきた。嗚呼！A！！良かった！



万雷の拍手、感激のステージでした♪

B08 徳尾 和彦

尾高忠明先生の指揮で「第九」を歌えることだけで気持ちは高ぶっていました。そして、当日は満席の来場者を前にして、第1楽章からのオケ演奏を聴いて自然と高揚感が高まってきました。「本気ですか？」の叱咤も受け、出だしのFreudeが歓喜あふれるように備えていました。指揮者の尾高先生の熱気ある表情が曲の進展につれ赤くなってきた、我々を高みに導いてくれました。音楽的なことは色々とおありでしょうが、むしろベートーヴェンの意図を組んで感情、想い、情熱を会場の後ろまで声を届けることだとのリハでの指導でした。その気持ちを今回皆さんと共有できたと思います。あの日の我々の熱気、熱量は大きかったと思え、そんな評価をいただいた。

fとffの強弱をより大きく、「Ganzen Welt」や「Brüder」、「binden」などこれ迄より強く意識した言葉でした。譜面を超えてでも感情を表現する・・・むずかしいけどエキサイティングだ。世界の同胞よ団結を！今こそ「第九」は世界に大きなメッセージを発する音楽であると強く感じました。歌い終わって会場には万雷の拍手が鳴り響き感激のステージでした。

当日まで根気よく指導いただいた坂本先生、松川先生、ピアノ伴奏の西谷・尾島両先生、そして運営の第一線で労苦された委員長、委員の皆さまに感謝しております。ありがとうございました。

「第九」

S54 田代 光枝

「第九」が歌いたくて入団した合唱団。都合で退団していたが、やはり、「第九」が歌いたくて再入団した。そして3回目の「第九」を歌うことができた。本番が終わると、『初めて歌った時、泣いていたな』と思い出した。

2015年1月25日、初めて人見記念講堂の舞台に立ち、新通先生の指揮で歌った時のこと。自分のことなのに、自分のことでないような、こんなことが自分の人生の出来事になったことが、不安と喜びとのよく理解できない感情で涙が溢れていたこと。今回の3回目にして、初めて第一楽章からの「第九」をやっと聴くことができたような気がする。オケのそれぞれの楽器の音が空気に乗って立ち上がっていく様、ソリストの今まさに歌わんとする息づかい、本当に素晴らしかった。

第3楽章では、心地よく、なんだか嬉しくなってきた、体もポカポカ温かくなってきた、すごく幸せを感じて、眠くなってしまった。いやいや、私は第4楽章で、この幸せ、歓びを歌うのだ、と。

偶然ではあるが、昨年「ミュージカル ベートーヴェン」を観た。ベートーヴェンの曲に、台詞が歌詞となって歌われていく。事実との隔たりはあると思うが、なんという人生なのだろうと、涙した。

何故「第九」を歌いたいと思うのかそれは今でもわからない。そして何回歌っても上手にならない悲しい現実。それでもきっと「歌いたい」と思い続けるのだと思う。あの「歓喜の歌」がきっと私の中の何かを救ってくれているのだと思うから。

A34 三角 喜美子



2020 年、世の中がコロナウイルスに怯え開催直前に中止を余儀なくされた「第九」から 4 年の月日が流れ、今回本番を迎える事が出来ました。当日は暖かな春の日差しにも後押しされ演奏会に参加できた事は大きな喜びで、終演後の鳴り響く拍手に包まれた時は皆様に感謝の気持ちでいっぱいでした。

1 年前、2024 年 の「名曲コンサート」の指揮者が尾高忠明先生と知った時は胸が高鳴りました。と言うのも私が社会人となり会社のコーラス部に在籍していた 1977 年に N 響とモーツァルト「レクイエム」の共演があり、私達は高輪にある N 響の練習場に何度か通わせてもらいました。本番はドイツの客演の指揮者でしたが、当時から尾高先生は N 響の常任指揮者として活躍されていて憧れの方でしたので、今回は夢が叶いとても嬉しかったです。

初めての練習の時は緊張しましたが、尾高先生の厳しさの中にも穏やかで柔らかな指揮に引き込まれ、本番も自然体で挑むことが出来、大変貴重な経験をさせて頂きました。

今回、私はソプラノからアルトに移って初めての「第九」合唱でしたので、自宅では常盤さま制作のオケ入り CD を聴き、言葉と耳を慣らす事に努め、水曜日の練習では皆さまの中でアルトの響きを学ばせて頂き、お陰様で「第九」のアルトパートも大好きになりました。

演奏会に来てくれた昔の合唱仲間からも、兎に角楽しく心洗われる想いで聴いた、コーラスもベテラン揃いで世田谷フィル、ソリスト達にも負けない響きで元気を頂いたとの言葉を貰い、旧交を温めるよい機会にもなりました。これは区民合唱団の歴史の積み重ねが美しいハーモニーとなってお客さまに感動を与えられたのだと思いました。

いつも温かく根気強くご指導下さった坂本先生、美しくも力強い伴奏で導いて下さった尾島先生、西谷先生、楽しくご指導頂いた松川先生そして細やかなサポートで団員を支えてくれている役員の皆さまに心から感謝の意を表したいと思います。

今年の「第九」は最高！！！！

T12 古川 健彦

今年の名曲コンサートを一言でいえば、過去に経験したことのない、素晴らしい演奏でした。一つ、一つの項目を列挙するまでもなく、全てが良かったです。

そうは言っても何か自分の感じたことを書くとすれば、オーケストラのコントラバスの重厚な響きにのせられコーラスも精いっぱいの声を出し、全パートが最高のパフォーマンスが出来たと思います。勿論、ソリストの方々も素晴らしい演奏でした。そしてそれを引き出して頂いた指揮者の尾高先生の物凄さに圧倒されました。

いつも名曲コンサートに来てくれる友人からは「生のオーケストラの演奏に迫力のある大合唱団の歌声を聴けてこんな贅沢はありません」と感謝のメールが届きま

した。これを励みにして、また次のコンサートに向け精進していきたいと思っています。

B12 溝口 佳美

音楽との関わりは小学一年生の時、学芸会で「一寸法師」の主演となりました。歌を歌いながら劇をやりました。これが原因で「歌」との関わりが出来ました。母も歌が好きでしたのでこれも影響しているかと思います。

小生が世田谷区民合唱団に入団した切っ掛けは、区民合唱団の「第九」を何度か聞きに行ったことでした。66歳（2006年）の時はまだ仕事をしていましたが、この年の8月23日（練習会場が砧区民会館）に行って入団した次第です。

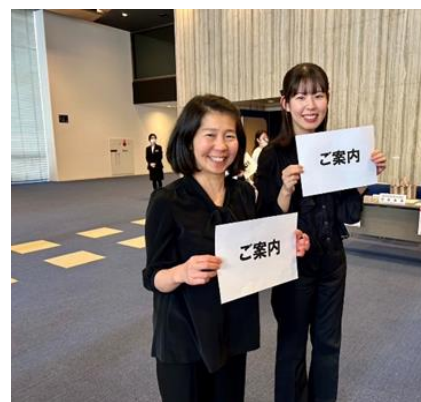
クラシック音楽が好きで中学生時代から親にレコードを買って貰い、家で良く聞いていました。入団後何度も「第九」を歌いましたが、今回の演奏は自分としても素晴らしい出来となりました。



本番日の最後の練習



受付の最終確認



宜しくお願い致します



館内放送準備 OK
尾高先生スタンバイ
尾高先生舞台へ登場



「第九」初演の地

「ドイツ兵板東俘虜(捕虜)収容所跡」を訪ねて

ソプラノ 24 清水 優子

コロナ禍前の2020年1月、徳島県鳴門市の「ドイツ兵板東俘虜収容所跡」を訪ねました。1914年、第1次世界大戦が勃発すると、日英同盟を結んでいた日本はそれを理由に中国・青島を拠点に進出していたドイツに宣戦布告をし、日独戦争は、地の利から圧倒的な兵力を持って臨んだ日本軍にドイツ軍が降伏するかたちで3ヶ月もしないうちに終結、その結果、日本は4600人以上のドイツ兵捕虜を受け入れることになったのです。

これほど大勢の捕虜を受け入れることになるとは想定していなかった日本は、各地の公民館や寺などを仮の収容所としたのですが、捕虜としての正当な扱いを求めるドイツ兵からの不満は増すばかりでした。そんな中1917年、鳴門に「板東俘虜収容所」が新設され、約1000人が収容されたのです。ドイツ兵捕虜の中には各分野の専門家がいて、収容所内にはパン工場や共同農場などが作られ、生産労働や文化活動など町の人々の興味、関心を引き次第に日独交流会館のようになるにつれ、町の人々は「ドイツさん」と親しみを込めて呼ぶようになったそうです。

ドイツ兵捕虜収容所の当時の所長である松江豊寿は、ドイツ兵の人権を尊重し、寛大で人道的な運営のもと、音楽以外の文化活動や、生産活動も収容所内外で認め敵国であるにもかかわらず住民と捕虜の交流も生まれ、奇跡のような史実が板東に残ったのです。

ドイツ兵たちも次第に松江所長への信頼と板東の人々に対する親愛の情を深めていきました。1918年6月1日には収容所で結成された楽団によってベートーヴェンの「交響曲第9番」が合唱付きで全曲演奏されました。女性がいなかったためソプラノ、アルトのパートを男性用に編曲し、収容所にはない楽器はオルガンでカバーするなど苦労と工夫の演奏だったのです。今では年末の恒例となっている「第九」の演奏が、日本で最初に全曲演奏されたのは、105年前、ここ板東俘虜収容所の小さな1室での不完全な、しかし心からの「歓喜の歌」だったのです。



ドイツ館内（第九シアター）

かつての板東俘虜収容所跡地は今、広い「ドイツ村公園」になっていて公園の入り口には当時の雰意気を再現した門があり、園内には実際に給水施設や、製パン所などがあった場所の基礎がそのまま残されていました。

「ドイツ兵の慰霊碑」や「ドイツ橋・めがね橋」日独友好と恒久平和のシンボルとして1983年建設された「ばんどうの鐘」、「道の駅第九の里」などもあり、中でも美しい白亜の洋館が「鳴門市・ドイツ館」と呼ばれ、この館には第1次世界大戦で俘虜（捕虜）となって日本に移送されたドイツ兵士たちと、この地が「板東」と呼ばれていたころの町民との交流の歴史が刻まれています。囚われの身として暮らすことになったドイツ兵捕虜たち、そこで「歓喜の歌」を歌うことになった数奇な運命が展示されており、館内の「第九シアター」では等身大の人形が当時のまま再現されていて演奏を聞かせてくれます。

俘虜たちの活動は多彩で定期的にコンサートを開いたり、演劇、スポーツ、講演、学習など活発な活動を行っていました。

毎年6月には鳴門市で「第九演奏会」があり、2018年には日本初演から100周年を祝って日本、ドイツ、中国、米国などの合唱団、また全国の「第九」愛好家が集まって記念コンサートが行われました。1974年には鳴門市とドイツ・リュースブルク市との間で姉妹都市盟約が締結されドイツ兵捕虜の子孫たちとも積極的な交流が続いています。「鳴門市・ドイツ館」の正門にはベートーヴェンの像が建っていて、像の後ろには「第九演奏会」の記念陶板も設置されていました。



(ベートーヴェンの像)



(鳴門市・ドイツ館)

楽しかった練習

S02 飯島 就子



尾高忠明マエストロの一番弟子、松川智也先生のご指導が全3回ありました。毎回、先生のピアノ伴奏による(なんと贅沢な!)ラジオ体操に始まり、ドイツ語の発音や発声の細かいご指導、指パッチンし過ぎて「左手の指の皮が剥けそうで痛い〜。でもゴルフは出来そう。僕ゴルフ大好きなんです♪」とのオチャメ発言、長袖厚着で登場されるも、汗を拭きながら毎回半袖Tシャツになるほどの熱意。(その



胸には『他力本願』のプリントが。「僕の人生のモットーです」とおっしゃっていました。)

尾高先生のご指導のときも早い時間にお見えになり、私達合唱団の素晴らしい指導者、坂本秀明音楽監督とご一緒に、客席からステージを見守ってくださっていました。どんな厳しい先生がいらっ



しやるかとドキドキしましたが、初回のご指導から大好きになりました。

2023 クリスマスコンサート@がやがや館

S28 鈴木 マリ

2023 年 12 月 3 日（日）13 時から「せたがや がやがや館」にてクリスマスコンサートが開催され、世田谷区民合唱団からは有志 29 名（S11、A8、T5、B5）が出演しました。指揮は坂本先生、伴奏は西谷先生、演奏曲は以下のとおりです。

- 1) アヴェ・ヴェルム・コルプス
 - 2) 流浪の民
 - 3) 美しく青きドナウ
 - 4) 「ふるさとの四季」より「故郷」「冬景色」「雪」「故郷」
 - 5) 「メサイヤ」より「ハレルヤ」
- アンコール 「聖夜」



会場の響きがあまりよくなかったので、用意していたアカペラの「おお雲雀」は歌わないことになりました。電子ピアノの小さな会場でしたが、定員 96 名のところ当日は立ち見の方も複数いらして大盛況となりました。アンコール曲の「聖夜」（きよしこの夜）はお客様と一緒に歌い、会場一体となってクリスマスをお祝いする気持ちが盛り上がりました。

団員が 29 名上がるともう動けないくらい小さなステージで、女声はピンクのブラウスにグレーのロングスカート+アクセサリー、男声はグレージャケットにピンクのネクタイという装いなのに足元は全員スリッパ履き。思い出す度にほのぼのした気持ちが蘇る演奏会でした。



ボランティア企画会 おたのしみコンサート

S50 矢口 晴美

第 203 回からの実施報告を致します。

203 回（2023 年 4 月 13 日）はデイホーム太子堂にて。204 回（同 5 月 19 日）はデイホーム中町。205 回（同 7 月 11 日）は友愛十字会デイサービス。206 回（同 10 月 31 日）はデイホーム松原。207 回（同 11 月 28 日）はデイホーム芦花。208 回（同 12 月 14 日）はデイホーム赤堤。209 回（2024 年 2 月 1 日）はデイ・ホーム世田谷で実施しました。

3 月 14 日は、210 回 区立きたざわ苑で実施の予定です（3 月 7 日現在）。

コロナ(covid-19)の影響で歌手は 8 人が限度、とか 10 人程度で、などと、先方さまから注文があったためか、203 回めではメンバー 12 人、その後欠席者も含めて、8 人だったり 9 人だったりしましたが、現在は 10 人。それとピアノの秋山美子先生、元団員で指揮者の添田みつえさんを含めると 12 人になります。曲目は今のところほとんど同じで、まずオープニングの「花のまわりで」。

第一部は、歌の世界旅行という趣向で、「ふじの山」、「カチューシャ」（冬の間は「ともしび」だった）、「エーデルワイス」、「オーシャンゼリゼ」、「サンタルチア」、「大きな古時計」。

第二部はソロタイム。今まで「猫の二重唱」、「ほしとたんぽぽ」、オペラ『ドン・ジョバンニ』より「手を取り合って」、オペラ『魔笛』より「パパパの二重唱」などが歌われました。

第三部は入居者さんといっしょに歌うコーナーです。まずコーラスグループが歌った後、入居者さんと一緒に歌います。まず入居者さんと発声練習ということで最初のうちは「ずいずいずっころばし」。後に「フニクリフニクラ」にかわりました。その後の曲目は、「かあさんの歌」、「みかんの花咲く丘」、「ここに幸あり」、「青い山脈」、「高原列車はゆく」。お別れに「今日のひととき」。アンコールに「上を向いて歩こう」。演奏時の特徴ですが、歌の一部をみんなが一部分ずつソロを歌いパフォーマンスを交えながら歌います。そこがなかなか好評で大変喜ばれています。

ところで、特別な会がありました。それは第 5 回友愛十字会のコンサートでのこと。歌の世界旅行でアメリカ本土から直接帰らずに、ハワイに立ち寄りました。そこで「真珠貝の歌」を歌ったのですが、この日、合唱団の団員でウクレレを弾いているグループがありまして、その方たちに参加してもらいオタコンメンバーは歌いながらフラダンスを踊りました。



それから 3 月 28 日、公開練習を行います。オタコンの練習は実はいつでも公開ですが、この日はオタコンの活動内容を知ってもらって気軽にいらしていただけるように設けました。もっともこの稿がみなさまの目に触れる頃は終わっているでしょうが。



編集後記

2024年2月18日（日）の「第九」は大成功の演奏会でした。満席の観客席から世田谷区民合唱団の演奏する「第九」を初めて聴きました。4人のソリストと世田谷フィルハーモニー管弦楽団との壮大な演奏は心に響き、とても感動しました。団員の皆様もたくさんの拍手にそれを感じ取っていらしたのではないのでしょうか。本当におめでとうございます。そしてお疲れ様でした。その舞台上に皆様と一緒に立てなかったことが悔やまれてなりません。

ご心配頂きました私の怪我は、お陰様で順調に回復し、新年度から復帰するつもりです。委員長を次の方に託しこの号が私の最後のお届けとなります。今までの御声援、ご協力、また助けていただいた委員の方々に対し心より感謝申し上げます。

コミュニケーション委員長 柴田 巳奈子

